

は し が き

京都大学東南アジア研究センターは昭和38年1月設立され、ただちに活動を開始した。第一年度は主としてタイ国を対象として、人文・社会・自然科学の各分野より総合的な研究を行ない、第二年度（昭和39年度）においてはタイを中心とする研究を一層大規模に拡大するとともに、新たにマレーシアの調査研究を実施に移した。

当研究センターの事業にはセンターの研究担当者となった本学、他大学およびその他の研究機関の研究者による現地調査の他に図書資料整備、研究者養成、出版などがありさらに研究者の交流計画として、国の内外の研究者との交流を重要なプログラムとしている。

さる9月30日から10月2日にかけて京都比叡山国際観光ホテルにおいて、農林省、海外技術協力事業団および東南アジア研究センターによって共催されたマラヤ稲作シンポジウムは東南アジア研究センターとしてはこの現地調査研究計画と交流計画の一環をなすものである。

シンポジウムの参加者はコロンボプランによる海外技術援助派遣者およびFAO 専門家としてマラヤ稲作の改良指導に従事した全専門家（5名はペーパーのみ提出）、学識経験者、農林省、海外技術協力事業団の関係責任者および京都大学関係者ら60余名に限定された。会議は周到な準備の下に進められ、マラヤ派遣専門家による技術協力の成果の報告、全参加者による討論など終始熱気をはらんだ雰囲気のうちにはしかも整然と進められ、予期以上の成果を収めることができた。

ここにシンポジウムの報告、討論の要旨をとりまとめ、その出版のため本研究センターの定期刊行物の一つであるこの「東南アジア研究」第2巻第3号（通巻第7号）をあて、これをシンポジウム特集号とした。この記録はマラヤ稲作についての基本的な文献であるとともに、広くマレーシア研究のためあるいは開発途上にある諸国の農業技術協力のための重要な資料となるであろう。

昭和40年1月

京都大学東南アジア研究センター所長

岩 村 忍